戦後七十年講演「僕達の勝敗」

ミハイル・シーシキン（奈倉有里訳・注）

この講演は、ICCEES のオフィシャルゲストとして来日したミハイル・シーシキンを迎え、2015 年８月９日、武蔵小山に於いてロシア語（通訳付）で行われた。講演会のタイトルは〈新潮〉2015 年８月号に掲載されたシーシキン氏の同名の随筆「僕達の勝敗――戦後七十年に寄せて――」（拙訳）をふまえている。この随筆で著者は、18 歳で戦争を体験した父親に語りかけ、自分たちは「戦争」に「負け」たのだと宣言する。

今回の講演では、さらに強制労働で行方不明になった祖父、戦地で「消息不明」になった伯父について、最近になって明らかになった真相についても語り、会場からの質問にも答え、ICCEES シンポジウムで語った作家と政治についての話の続きから、ウリツカヤの作家同盟脱退についてなど、その内容は多岐にわたった。なお司会は伊藤愉、通訳は奈倉有里、主催は篝火編集委員会と、チェマダンの協力により実現した。会場を提供していただいた武蔵小山の AM-A-LAB にも、心から感謝の意を表したい。

伊藤：本日はお越しいただきありがとうございます。司会進行を務めます伊藤愉と申します。シーシキンさんの来日は、2010 年、2012 年に続き、今回で３回目です。今回は ICCEES でのシンポジウムに合わせて来日されました。これまでの来日で講演会は開催されていたのですが、前回の来日から今日までの間には、2013 年 11 月に当時のヤヌコヴィチ政権が、EU との政治・貿易協定の調印を見送ったことに端を発するウクライナ騒乱があり、クリミアへのロシアの侵攻など、極めて複雑な政治的な問題が生じています。この問題に関して、シーシキンさんは継続的に発言を続けており、それは奈倉さんの翻訳によって日本語でも読むことができます。いま起きている時事的な問題に関してのシーシキンさんの率直な言葉は、日本に住んでいる私たちにも様々な思考を促します。

シーシキン：これほどの暑さのなか、日曜の夜に二時間も床に座って私の話を聞いてくれるために皆さんが集まってくれたことを、たいへん嬉しく思います。沼野充義先生も、お越しいただきありがとうございます。沼野先生ご夫妻の尽力で、今回の巨大学会 ICCEES が成功したのだと思います。日本語訳の『手紙』[1] が出版されたのも沼野先生の推薦のおかげであり、そして何よりここにいる翻訳者の奈倉さんのおかげでもあります。

さて、こういった小説や翻訳の話をするのはとても楽しいものですが、その一方で楽しくない、つらい現実の話――ロシアとウクライナの現状についても語らなければなりません。

1990 年代にロシアの政権を握ったのは犯罪者の集団であり、彼らはすべての国民を人質に取まし

た。最近では 2011 年から 12 年にかけて反政府運動が起きたことがありました[2]。私も丁度その時期モスクワに居たので、妻と一緒にサハロフ広場に出てデモに加わりました。しかしこれらの試みはすべて失敗に終わりました。そのうえプーチンがそこから学んだのは、自己の保身の必要性だけでした。ウクライナのマイダンで起きた一連の抗議運動の末のヤヌコヴィチ政権の失墜と同じことが自分の身にも起こるかもしれない――その恐怖こそが今のプーチンを動かしています。プーチンが最も恐れているのは、プロパガンダが言いたてる「アメリカ」ではありません。自分の国の国民なのです。これは独裁国家としてはなにも目新しいことではありません。そしてそのような国家が自己の保身のために決まって欲するものが、戦争なのです。彼等の目的は大きな戦争をして敵に勝つことではなく、「戦争」という状態そのものです。国が「戦争」状態でさえあれば、反体制派に対しては容易に「民族の裏切者」というレッテルを張ることが出来ます。今の政府はもしウクライナとでなければベラルーシとでも火星人とでも戦争をしていたはずです。独裁国家がいちばんに縋るものは「愛国心」です。歴史上の独裁者たちは皆、人の心のなかにある最も尊いもの――故郷を愛する気持ちを悪用してきました。

そのひとつの例えとして、父の話をしようと思います。

父は 1920 年代にタンボフ近くの田舎で、牛を一頭飼っているだけの貧しい農家の子として生まれました。1930 年代に農業の集団化によってその牛を没収されました。父の父、つまり祖父は私と同じミハイルという名でした。祖父は抗議しました――「小さな子供が二人もいるのに、牛を連れて行かれたら生活ができない」と。すると祖父はたちまち捕えられ、シベリアに送られてしまったのです。残されたのは、牛を取りあげられ夫を捕えられ、小さな息子二人を抱えて一人きりになった祖母でした。この哀れな祖母は九十歳まで長生きしました。老いた祖母は私の父と一緒に暮らしていて、私はよく祖母に電話をかけました。「こんにちは、ミーシャだよ」というと、「ああ、ミハイルかい」と言って嬉しそうに話してくれるのですが、そうしているうちに不意に意識が遠い昔に戻ってしまう――私と同じ「ミハイル」という名だった祖父が捕えられたその日に戻ってしまうことがあり、電話口で突然叫びだすのです――「私の夫を返して! どうして連れて行くの!」と。これほどの悲劇というものは、一度起きたら決して忘れるものではありません。どんなに長生きしても、死ぬまでその人に付きまとうのです。これは幼くして自分の父親が「人民の敵」として捕えられた私の父にとっても悲劇でした。子供は父親を誇りに思いたいという気持ちを持つものですが、父はその気持ちを抑え込み、父親について書く欄にはいつも「死亡」と記入していたのです。自分の父親が「人民の敵」だと知れたら生活していけないからですが、それと同時に父はその「死亡」が嘘だとばれてしまったらどうしよう、という恐怖も生涯抱え続けていました。戦争が始まったとき、父は十八で、兵士として戦場へ行きました。父は「敵から祖国を守る」ために戦争に行ったつもりでした。しかし父は国家体制に利用されていただけであり、自分の父親を捕えて殺した国家体制を守ったにすぎませんでした。

国家体制が自己の保身に走るとき、必ずこれと同じようなことが起きます。プーチンが今やっていることもまったく同じです。プロパガンダを用いて、世界中がロシアを潰そうとしているのだ、アメリカは敵だとけしかけています。「ウクライナのファシストはアメリカの手先である」、だからロシアは「ウクライナ」の向こうにある「アメリカ」の脅威から身を守らなければならないと。プロパガンダはまたしても、「故郷」と「独裁国家」というまったく別のものを同一視させようとしています。

司会：それではここで一旦、会場からの質問を受け付けたいと思います。

質問者１：おじいちゃんはどうなったんですか?
シーシキン：強制労働では、シベリアのバイカル＝アムール鉄道の建設をさせられていたようです。一度だけ手紙が来ました。当時の強制労働者の手紙の出し方は、労働者が家族へ宛てた手紙を列車の窓に投げ込み、その手紙を拾った人が人づてに家族のもとへ届ける、という極めて不確かな方法でした。その後、祖父の消息は分からなくなりました。私の「ミハイル」という名はこの祖父にちなんでつけられたものです。

シーシキン：次に国家と国民の関係について、私の伯父の例を話してみたいと思います。家族の話がすぐ政治に繋がるのは、決して我が家が特殊な例というわけではありません。ロシアで家族の話をしようと思うと、どんな家族の物語も政治に直結してしまうという現実があるのです。

伯父は 1941 年の 6 月に戦地に赴きましたが、8 月には戦死の知らせが届きました。そこには他の戦死公報と同じく「消息不明」と書かれていました。軍が退却する途中で命を落とした兵士は死体を回収されることもなく「消息不明」の紙きれだけが届けられたのです。私は、祖母が折々にその紙を出してきてはキスをして泣いていた姿をよく覚えています。その紙に書いてあった文字のなかで私の記憶に残っているのは「カンダラクシャ」というフィンランド国境付近の地名だけでした。

1990 年代に祖母と父が亡くなり、2010 年頃には私は世界的に有名な作家として様々な国に呼ばれるようになりました。そしてノルウェーにも招かれ、ノルウェー語に訳された私の本のプレゼンテーションに出席しました。その際に翻訳者と一緒に訪れたノルウェー北部の都市トロムスの博物館には、ロシア人捕虜についての資料を保管しているコーナーがありました。捕虜はドイツ軍に追いたてられフィンランドからノルウェー北部まで来たのだという話でした。私はふと伯父の戦死公報にあったカンダラクシャという地名を思い出し「もしかしたら伯父は捕虜としてここへ来たかもしれない」と考え、捕虜の中に伯父がいなかったかどうか調べてもらいました。すると一週間後、アーカイブから返事が来ました。捕虜、ボリス・ミハイロヴィチ・シーシキン、生年月日、指紋――伯父が本当にその収容所にいたという記録で、祖母の名も書かれていました。その紙を手にしたとき、まるで死んだ伯父が甦ったような感動を覚え、父や祖母がこのことを知らずに死んでしまったことを惜しく思いました。ところが、ふと裏面を見ると「ユダヤ人であるとの密告がなされたため、1942 年の夏に射殺」とあったのです。今甦ったと感じた人間が、また瞬時に殺されてしまった。私は考え直しました――父や祖母は、このことを知らずに死んで良かったのだと。書類はドイツ語で書かれていましたが、ふと見ると、各行の下に手書きですべてロシア語訳が書きこまれていました。なんと、これらの資料はすべて戦後ロシア政府に送られ、今でもモスクワ郊外にある軍事関連文書のアーカイブに眠っているというのです。ペレストロイカ期にそのアーカイブが公開され、そのときにノルウェーを含む西側の学者がどっと押しかけて多くの文書をコピーした、そのおかげで今それを目にすることが出来たわけですが、それはつまり、政府が戦後ずっとすべてを知っていながら、私の父や祖母に――国民に、その資料の存在を、すなわち家族の消息を隠し続けていたということです。

これが、ロシアの国家の国民に対する態度です。人々がいくら命をかけて「国家」を守るつもりでいても、国家は国民を利用して使い捨てにするだけです。

質問者２：私は赤十字で働いています。ロシア政府がこの戦争を利用しているように、アメリカや西側もこの戦争を利用しているという意見もありますがどうでしょうか。
シーシキン：あなたは日本人で、日本はこの戦争に加わっていない。だから客観的に物事を見ようとしているのだと思いますし、その気持ちは分かります。ただし、戦争とは何かといえば、その「客観」が存在しなくなる場所――それが戦争なのです。いま、ロシアでは国内は言論上の市民戦争――冷たい内戦ともいえるほど、国民同士が激しく対立する日々が続いています。悲しいことに、戦争という問題に触れたとき、そこには「中立」などという立ち位置は存在しません。アメリカが本当に陰でウクライナを操っている、この戦争を利用していると考える人もいます。しかしその見解は、プーチンのプロパガンダが盛んに主張していることと同じになってしまうのです。私の個人的な見解を言うなら、アメリカがロシアを滅ぼそうと思っているとは思いません。これはアメリカに少し住めば分かることですが、アメリカにとってロシアというのは、普段はほぼ存在しないも同然の国です。ロシアにとってアメリカが常にものすごい存在感を放ち続けているのとは、まったく異なります。アメリカがロシアを意識するのは、「ロシアが本気で戦争をしようとしている、戦争を始めるために恐ろしい兵器のスイッチを押す可能性のある狂人がロシアにいる」と実感した時だけです。

質問者３：一昨日の ICCEES でのシンポジウムのお話について質問です。シーシキンさんはシュテファン・ツヴァイクとトーマス・マンという二人の作家についてお話され、作家の使命について語りました。そこで私はもう一人の作家――ベルトルト・ブレヒトについて、彼の作家としての立場について、どうお考えかお聞きしたいのですが。
シーシキン：作家にとって大事なのは、才能のほかにもうひとつあって、それは世界に対する根源的な感覚とでもいうべきものです。例えば十月革命後、すべての芸術家は選択を迫られました――革命政府と共に歩むべきか、否か。革命政府に協力をしようという作家がいる一方で、イワン・ブーニンのように最初からすべて分かっていて権力側にはつかないと断言した作家もいました。他方メイエルホリドは革命政府に協力すると決断しましたが、その決断は最悪の結末を招きました――彼は銃殺され、彼の妻も殺されたのです。

トーマス・マンは、当時の独裁政権に対し「これではいけない」という確固とした「感覚」を持ち合わせた作家でした。しかしブレヒトにはその「感覚」が無く、東ドイツの政府側についた。比較的早く病死したのは、彼にとっては幸いだったのかもしれません。長く生きていたら、おそらくメイエルホリドと同じような最期を迎えていたでしょう。

いま、ロシアの芸術家や作家は、それと同じような決断を迫られています。ほんの僅かな期間のうちに、残念なことにたいへん多くの芸術家がプーチンのご機嫌取りをするようになりました。しかし例えば劇場の支配人のような責任のある立場にいる人――例えばモスクワ芸術座のオレグ・タバコフであるとか、そういった人々が政権の側につかざるを得ないのには、事情があります。そう表明しない限り、彼の下にいる役者や演出家や舞台芸術家といった数百人という人々が職を失うことになるからです。しかし私たちがそのような芸術家を眺め「ああ、仕方なかったんだな」と諦めること自体、スターリン時代からずっとソヴィエトで行われてきたことです。これでは 21 世紀にもなって、我々はまったく進歩していないことになってしまうのです。

作家は劇場の支配人とは違います。作家は、自分の下で働く役者や部下を抱えているわけでもなく、本来最も自由な発言ができるはずの立場にいます。ところが昨年 12 月、ロシアペンクラブで悲しい出来事が起こりました。クリミア半島にまつわる一連の件に関し、リュドミラ・ウリツカヤは、政府に対し反対の意思を表明しました。そして彼女はペンクラブの次期代表とも考えられる位置にいたので、ペンでも団結してその意思を示そうと呼びかけたわけです。ところがそれに対し、アンドレイ・ビートフを会長とするロシアペンクラブは、あろうことかウリツカヤの除名という信じられない行動に出ました。そしてその二ヶ月後の今年 2 月、テレビにはクレムリンでロシア国家文学賞を受賞するビートフの姿が映し出されていました。私が若い頃、アンドレイ・ビートフの本は発禁本でした。言論の自由の象徴ともいえる彼の本を、私たちは夢中で読んだものです。そのビートフが、ウリツカヤを除名し国から賞を貰う――これは本当に胸の痛む出来事でした[3]。しかし、歴史の証明するように――先ほどのメイエルホリドの例でもそうですが、そのようにして体制の側についた作家は、決して幸福な最期を迎えることはありません。

質問者 4：お話しいただいた「冷たい内戦」というものは、今のところ「言語」「言葉」のレベルで具現化しているのだと思いますが、それが具体的に現代ロシア語にどう表れてきているのか、またシーシキンさんの作品にも影響を及ぼしてしているのかどうかについても、お聞かせいただければと思います。

シーシキン：たいへんいい質問です。ロシア語圏のインターネットを開けばわかることですが、ロシア語の中に、非常に多くの憎悪が蔓延しています。ロシアはファシズム国家になりつつあります。ファシズムは常に憎悪を中心として成り立っています。憎悪は、大気の中をただ漂っているわけではありません。憎悪が生き延びるためには「肉体」が必要になってくる――その「体」となるものこそ、たいへん悲しいことに「言葉」なのです。リベラル派を嘲笑するために生まれた、リベラルとペデラスト（児童性愛者）を掛け合わせた「リベラスト」という言葉を始め、憎悪を詰め込んだような、聞くに堪えない酷い造語が飛び交っています。

さて、作家はこの言葉を使うべきでしょうか。私は自分の作品のなかで、これら憎しみの言葉を使うことは絶対にありません。そういった言葉を率先して使う作家もいますが、彼らはそれによって、「冷たい内戦」が本当の内戦に発展するよう推し進めているのです。蔓延してしまった憎悪は、長いこと大人しく留まってはいません―― やがて、そのはけ口を求めるようになります。

そう遠くない未来に憎悪が破裂し、ロシアでなにか恐ろしいことが起こる――私は今、私たちがその悲しい事件の目撃者になってしまうのではないかという懸念に駆られています。そして「言葉」は、国が戦闘の可能性を宿しているその状態を示すバロメーターになっているのです。

伊藤：それでは最後に先ほど会場にお越しの方から頂いた「ロシアの別荘、ダーチャとは何か」という質問にお答えいただいて、終わりにしたいと思います。

シーシキン：ロシアにおいてダーチャとは、自由への夢であり憧れです。人々は普段、奴隷のような人生を送っている。例えば仕事ですが――都市にいて仕事をしているときは常に奴隷状態である人々が、ダーチャではそこから解放され、自由を夢見る。ダーチャとは、ロシアの作家の夢でもあります。ダーチャに住み、雲を見上げ花を眺め、偉大な文学作品を書くというのは、ロシアの作家の最高の

夢かもしれません。今日ここにはパステルナークの専門家もいます。彼に訊けば、パステルナークがダーチャなしの生活など想像し得なかったと証言してくれるでしょう。私は小さなころからずっと都心で暮らしてきたこともあり、そういったダーチャへの「夢」が、とてもよくわかるのです。

Notes

1. ミハイル・シーシキン『手紙』奈倉有里訳、新潮社、2012 年
2. 2011 ～ 12 年、選挙の不正が発覚した際に起きた大規模なデモ運動。集会を呼びかけたネムツォフは 2015 年に暗殺された。
3. ウリツカヤのペンクラブ脱退は、彼女自身の声明によればロシアペン内部の分裂を受けてのもので、他にも詩人イーゴリ・イグナチエフをはじめ一定数が脱退している。会長のビートフが実際どう関わっていたのか断定的なことは言えない状況だが、この叙述はシーシキン氏に代表されるウリツカヤを応援していた人々の心象を表すものとしてそのまま掲載する。シーシキンの初来日は 2010 年、東京で開催された国際ペン大会に合わせてのもので、ロシアからはビートフとシーシキンが並んで参加していた。当時のシーシキンのビートフに寄せる敬愛の念を思い返すと、近年の経緯には胸が痛まずにいられない。いずれにせよロシアペンクラブはかなり強権的な方針をとるようになっており、これは作家の表現の自由を守るべきペンの存在意義と矛盾するとして問題になっている。